

## 村上華岳作品における目の表現 一前期国展出品作を中心に

藤本真名美（和歌山県立近代美術館）

京都市立絵画専門学校（現在の京都市立芸術大学）に学んだ日本画家の小野竹喬、土田麦僊、村上華岳、野長瀬晩花、榊原紫峰により、大正7年（1918）に京都で創立された国画創作協会は、同年から約10年間にわたって、7回の展覧会（国画創作協会展覧会。以下、国展）を開催した。

村上華岳（1888～1939）は、その前期にあたる第1回～第3回展に人物像を各1点出品している。第1回展に出品した《聖者の死》（1918年・関東大震災により焼失。大下絵が京都市美術館に伝存）では、悲嘆に暮れる群衆の中で聖者が涅槃に入る様子を描き、第2回展の《日高河清姫図》（1919年・東京国立近代美術館蔵）には紀州道成寺伝説に基づいて、僧安珍を追いかけた末、日高川に身を投じる刹那の清姫を発表し、第3回展では《裸婦図》（1920年・山種美術館蔵）によって、華岳の理想とした「久遠の女性」を表現した。

本発表ではこれらの3作品や同時期の華岳の作例を中心に、その目の表現に焦点を当てる。今回、華岳が第1回展のために準備したものの、展覧会へは恐らく出品しなかった作品として、目の見えない一人の男性を描いた《盲者の春》（現存不詳。『新京都』1918年11月にモノクロ図版が掲載）という作品の存在を確認することができた。この時期から華岳は特に目を意識して制作するようになったと考えられ、その後、彼のほぼ全ての作品において、神仏など尊崇の対象となる存在は開眼し、俗人は目を閉じて表現されている。この描写には、国画創作協会が顧問を務めた美学者の中井宗太郎からの影響を指摘することができる。中井は、大正7（1918）年2月の雑誌『中外美術』に発表した「金棺出現と色彩象徴」という文章の中で、モーリス・メーテルリンクの戯曲「群盲」（Les Aveugles）にも触れながら、「衆生は道と光とを失った群盲である。この群盲に道と光を與ふるものは聖者である。」として、釈迦の金棺出現について解説している。この頃、直接華岳が《釈迦金棺出現図》（京都国立博物館蔵）の解説を中井から受けて、釈迦と摩耶夫人の母子の物語に創作意欲をかき立てられていた様子も確認できることから、華岳が《聖者の死》で展開した世界観や表現も《釈迦金棺出現図》やその解説を参照した可能性が高い。

本発表では、第2回展のために準備されながら未発表となった《母と子》などを含めて、主に前期国展時代の目の描写の変遷を考察し、華岳の制作態度や女性観を浮かび上がらせる。加えて、主に《日高河清姫図》について、西洋絵画の影響で「引目鉤鼻」を否定し、解剖学的視点に基づいて多くが伏目で描かれた聖女像や美人画、あるいは物語の再現性に主眼を置いて発展した歴史画といった明治期以降の面貌表現を踏まえ、伝統的な引目を「盲目」すなわち俗人の苦悩に置き換えた手法に前時代とは異なる象徴性を指摘し、同作を大正期の美術に画期をもたらした作例として、近代日本美術史上に改めて位置付けを行う。